

## その九 三河地震(1945年)

# 戦争によって葬り去られた 大被害地震

林 能成  
木村 玲欧

三河地震が発生したのは、第二次世界大戦末期の昭和20年1月13日午前3時38分です。東海地方では、約40日前の昭和19年12月7日に紀伊半島沖を震源とする東南海地震が発生しており、連続して2度の震災に見舞われる事態となりました。しかし当時の社会情勢では、これらの地震による被害報道が許されず、ほとんどの国民にはその惨状が伝えられることはありませんでした。そして終戦に伴う混乱もあって三河地震は歴史の中に埋もれかけてしまったのです。

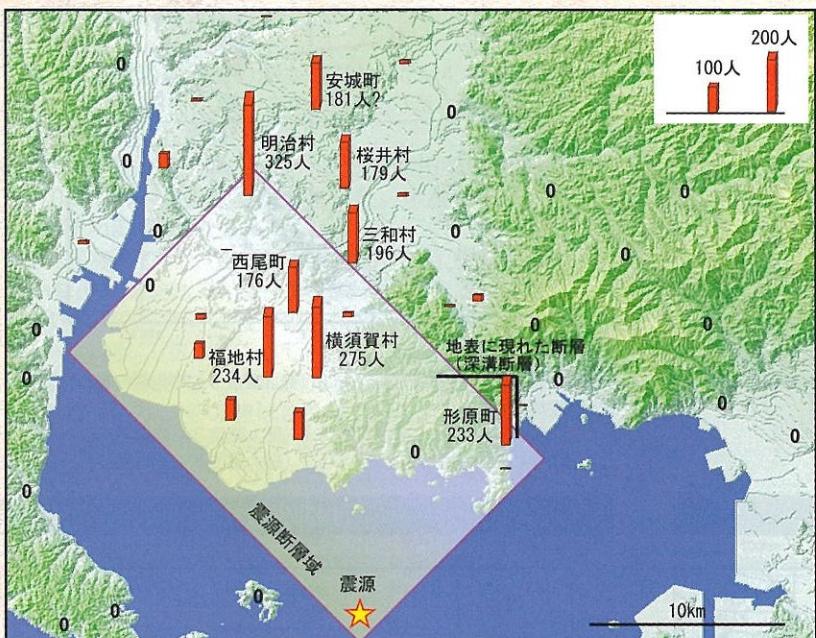


図1 三河地震の市町村毎の死者数(飯田(1978)による)。図中に示す震源断層域はKimuchi et al. (2003)によって再決定されたものである。概略地図の中のワクは詳細図の範囲を示す。



木村 玲欧(きむら・れお)氏

早稲田大学卒業後、京都大学大学院情報学研究科博士後期課程単位取得退学。専門は防災心理学・社会心理学。阪神・淡路大震災などを事例とした地震災害における被災者心理・行動・生活再建過程の解明と被害想定手法の研究で博士(情報学)の学位を取得。2003年4月より名古屋大学災害対策室 助手。最近は、新潟県中越地震やインド洋巨大地震・津波におけるインタビュー調査・質問紙調査などの研究も行なっており、防災に活かす研究にも取り組んでいる。



林 能成(はやし・よしなり)氏

北海道大学卒業後、JR東海勤務を経て、東京大学大学院理学系研究科博士課程修了。地震波形の詳細な解析から伊豆半島東方沖群発地震の発生メカニズムを明らかにする研究で博士(理学)の学位を取得。その後、防災科学技術研究所特別研究員を経て、2003年4月より名古屋大学災害対策室 助手。火山地震学の研究に加え、リアルタイム地震情報システムの開発や、過去の地震災害を振り起こし現在の地震学で再解釈して防災に活かす研究にも取り組んでいる。

戦後40年近くたち、飯田汲事、山下文男、蒲郡市教育員会などによる被害調査が精力的に進められました。しかし地震後の対応の様子など未だ不明な点も多く残されています。また報道管制ばかりでなくフィルムなどの資材不足の影響もあり、被害の様子を伝える写真はほとんど残っていません。

## 2|被災体験を 絵におこす

そこで、我々は被災者へのインタビュー調査を行い、三河地震の被害状況や災害対応の様子を明らかにしようとしました。インタビューでは、①家族・集落にどのような被害があったか、②地震が起きてから時間を追ってどのような意識をもち・行動したか、③どのような人・組織に助けられたか、という3点を重点的に聞いています。

また、インタビューを文字で残すだけでは、子供たちや地震にあまり縁がない普通の人には興味を持ってもらえない。そこで絵で被害状況や災害対応の様子を残すことを考えました。幸いなことに愛知県立芸術大学日本画専攻の非常勤講師、阪野智啓さんと藤田哲也さんという二人の若手画家が協力してくれることになりました。二人は創作活動のみならず、歴史や文化にも幅広い知識と興味を持っており、余人をもっては代えがたい存在です。

実際のインタビューでは画家の方も必ず同席して、被災者の話を伺いま

す(図2)。その後、我々と画家が相談して絵に残すべきシーンや教訓を選び、絵にするのに必要な資料なども探して、絵を描いていきます。その後、絵を持つてもう一度インタビューに行き、記憶と異なる点などを指摘してもらい、修正または書き直しを行って完成させます。このような手続きを経ることで絵の完成度を高められるばかりではなく、被災者の60年前の記憶がより鮮明になり、新しい話が聞ける場合もあるのです。

## 3|被災者の体験

現在(2005年11月)までに14回の正式インタビューを行い、絵も90枚以上になりました。今回は紙面の関係もあり、三河地震で「どのように救助・救出がなされたのか」について記したいと思います。

岡田菊雄さんの家は全壊し、岡田さん自身も家に閉じこめられました。真っ暗でしたが、壁がぬけて星空が見えたため、隣で泣く妹を抱きかかえて外に出ました。自力(自助)で脱出した一例です。岩瀬繁松さんの自宅も全壊しましたが、隣組で下敷きになった人はいなく、みなが総出で生き埋めになった母の救出を手伝ってくれました。二人は創作活動のみならず、歴史や文化にも幅広い知識と興味を持っており、余人をもっては代えがたい存在です。

一方、原田三郎さんの地域では周囲の家もろとも全壊しました。原田さんが何とかして外に出ると、隣のおばあさんが生き埋めになっていて、必死に



図2 インタビュー調査の様子

素手で瓦をはがして救出しました。原田さんがいなければ救助されなかつたかもしれません。さらに富田達躬さんの集落は9割以上の家が全壊し、隣の家が火事になって中から生き埋めの女学生が助けを求めていましたが、どこも自分の家族のことで精一杯で、結局、助けることができませんでした(図4)。

このように、被災状況によっては救助救出に共助が利用できないことがわかつてきました。これらを教訓に、例えば、古い木造家屋居住者は家屋の耐震化などの自助努力を積極的に行うこと、高齢者独居世帯では「地域で優先的に安否確認してもらう」ように民生委員や町内会に働きかけるなど、さまざまな対策が未来への教訓として浮かび上がってきた。

## 4|今後の展開

インタビュー調査は今後も継続して続けていきます。さまざまな教訓を絵に残していくことで三河地震の被害や復興の様子を伝えていくと考えています。またこれまでの試みを中心日新聞社が評価してくださり、11月に『三河地震60年目の真実』という本を出版いたしました。興味のある方は、こちらをご覧いただければ幸いです。

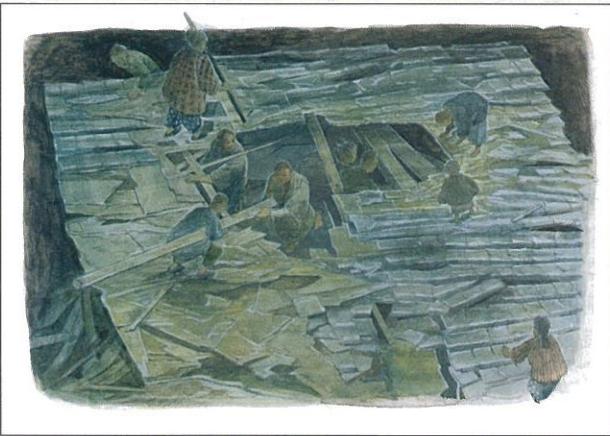


図3 隣組総出で生き埋めになった母の救出を手伝ってくれた(岩瀬繁松さんの体験談を元に作成、藤田哲也画)

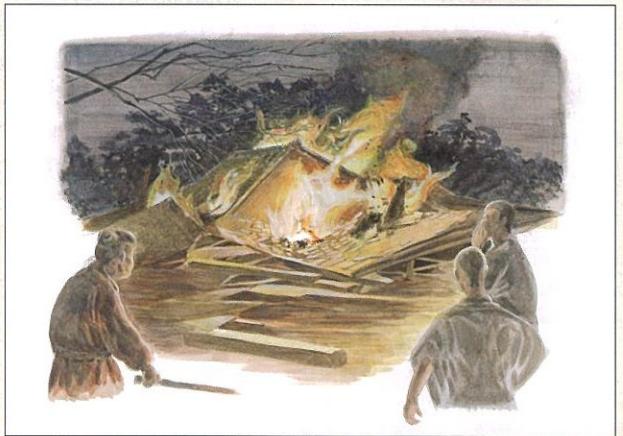


図4 隣の家が火事になり中から女学生が助けを求めていたが助けることはできなかった(富田達躬さんの体験談を元に作成、藤田哲也画)